

令和2年白老町議会人口減少に対応する政策研究会会議録

令和2年10月28日（水曜日）

開 会 午後3時00分

閉 会 午後5時00分

○会議に付した事件

政策研究講演会 講師：今井 太志 氏

講演：「白老町の若者定住に向けて」

○出席委員（8名）

座 長	大 淵 紀 夫 君	副 座 長	佐 藤 雄 大 君
委 員	久 保 一 美 君	委 員	森 哲 也 君
委 員	西 田 祐 子 君	委 員	氏 家 裕 治 君
委 員	長谷川 かおり 君	委 員	氏 家 裕 治 君
委員外委員	吉 谷 一 孝 君	委員外委員	小 西 秀 延 君
委員外委員	及 川 保 君		

○欠席委員（なし）

○職務のため出席した事務局職員

事 務 局 長	高 橋 裕 明 君
主 査	小野寺 修 男 君
主 任	村 上 さやか 君

人口減少に対応する政策研究会（第8回）

【調査事項】

事務調査：人口減少に対応する政策研究「若者定住」について

政策研究講演会

次 第

- | | | | |
|---|-----|---------------------|--------|
| 1 | 開 会 | （司会：佐藤雄大 副座長） | 15:00～ |
| 2 | 挨 拶 | （大淵紀夫 政策研究会座長） | 15:05～ |
| 3 | 講 演 | （白老町における若者の定住策について） | 15:15～ |
| 4 | 質 疑 | | 16:15～ |
| 5 | 閉 会 | | 17:00 |

内 容

講演：「白老町の若者定住に向けて」

講師：今井 太志 氏

公益財団法人 アイヌ民族文化財団専務理事兼事務局長

1. ウポポイの運営状況
2. 財団職員の状況
3. 白老町における若者定住に向けて
4. 白老町の地域振興・若者定住に向けた個人的提言

[質疑応答（要旨）]

○久保委員 ウポポイは白老鉄北地区にあり、そちらの開発が進んでいるが、鉄南地区における問題点は何か。

○今井講師 現在は車で来町が多いこともあり、鉄南地区には人があまり流れていないと思う。ただ、現在ある宿泊施設やスイーツのお店などは利用され、喜ばれていると思う。全く好影響がないわけではないと思うが、ウポポイに来た人にランチをしてもらう戦略は上手くいっていないようだ。しかし、それにとらわれずに、個々の魅力を高めることで、ウポポイとは直接関係なく、白老に来たらここへ行く、という形でお店が増えていくということではないか。

○広地議員 地域カンパニーの成功には人材が重要であるが、人材の確保や育成をどのように考えているか。

○今井講師 人材の確保には、それなりの給与などの待遇が必要であると思う。しかし、どの人材が有能であるかは先に分からないため、30歳代位のやる気のある若手を3人くらい雇用して、意気を感じさせ、様々な方面の人と関わって取り組んでもらう方法はどうか。白老町が目指すべきは、大きなことをねらって始めるより、小さな積み重ねにより人材が育成されていくことなのではないか。

○広地議員 少々大胆な挑戦から成果が生まれるのではないかと考えている。予算等審査特別委員会などでも様々な意見が出て、まちづくりのための理解を広げることは難しいと議員の立場からも感じている。人件費が高くなれば、当然反対の声が上がってくる。大胆な発想で実行するには、町民の理解を得ることが重要であるが、そのために必要なことは何か。

○今井講師 まちづくり会社のような組織では自立経営は困難である。まちのため人のため、という他者への貢献のために、自分のまちづくり会社を黒字にすることは、概念上あり得ないことだと捉えている。

町民の理解のハードルは非常に高く、町から経費を支出するには、住民が出資してでも支えるく

らいの気持ちがなければ、なかなか実行には至らない。それほど価値があることを伝えるつもりで進めていく必要がある。とはいえ、抽象論や理屈を並べても理解は得られないため、現実の一つずつ成果を見せていくことが求められる。目標は高く持ちつつ、着実に成果を生むこと（アーリー・スモール・サクセス）が必要である。

今回のテーマは若者定住であり、若者を増やすには、相応の費用が発生し、失敗もあるだろうし、絶対に成功する保障はない、という前提が必須である。誰かが責任を取る気持ちで判断しなければ何も起きない。しかし、若い人はそうそう増えるものではない。

一方で、外から来なくても、町内にいる若者が幸せになればよく、子供たちがまちに戻ってきて、働く場を得られるならそれがいい、と地域が選択するなら、それはそれでありだと思う。

若者定住のためには若者を応援することが重要である。若者に指図をしても定住には結びつかない。若者の好きなようにさせなければ、住みたいと思わないし、チャレンジをしたいとも思わない。そして、頑張りきれない。そこにはリスクが伴い、お金もかかるが、それでも町として取り組めるのかという部分の共通認識を持つ必要がある。その一致さえあればと思う。

町内で起業している人は、コンセプトや人的ネットワークがあり、自分の求める形を目指すからこそ、多少収入が少なくても頑張れる。それを見て自分も関わりたい、と地域外から人が来る。行政は人の交流のために箱モノをつくることを考えるが、最近はそれが好事例になるとは限らない。若者が自分で自分の場所と仕事をつくりあげたいと考えている。

○吉谷議員 先ほどの大町商店街の話について、自分はほかの見方を持っている。ウポポイができてから、人の流れは確実にできている。商店街に車が通るようになり、駐車帯に車が停まるようになった。札幌ナンバーなど他の地方の車を見かけるようになった。チャンスはあるという認識を議員も地域も行政も持つべきあると思う。そのような捉えから、挑戦しようとしている若者に周知していくことが大事であり、応援していきたいと思うが。

○今井講師 行政主導で若者支援を進めるのはなかなか大変であるが、ウポポイに来る人が多くなる中で、白老町に魅力を感じて、ここで勝負したいと思う若者が増えると考えているので、そのための創業支援が必要であると思う。

行政によるてこ入れが必要なのは、インフォメーションセンター付近ではないかと思う。施設の潜在力が発揮され、将来的に道の駅になれば集客力が上がる。さらに面積を広くすると、もっと発展する可能性がある。議論等があったと思うが、チャレンジブースがあればもっとよい。

民間投資が難しい中で、小さなチャレンジに誘導する場をつくるのが、今の白老には合っているのではないか。そのイメージを世間に広めていくことで、大町商店街の盛り上がりにつながり、町内全体への波及になるのではないか。

○西田委員 白老のトータルブランドイメージ、訪れたいまちとしての喚起力について、白老町はどのような方向を目指していけばよいのか。

○今井講師 ターゲットをしぼることなく、全世代のあらゆる属性を対象としてよいと思っている。それは白老町には様々な資源があり、あれもこれもできるという可能性があるからである。来町する人が選べるようになればよい。そのイメージをどのように伝えるかである。

白老町は視覚的イメージがあまりない。ニセコなら羊蹄山があり、それに付随していろいろなものがある。函館は坂のある異国情緒漂うまちである。逆に、茨城も栃木もよいところが沢山あるが、イメージが浮かびにくい。一点攻めでイメージを決め、様々な媒体で発信するなど工夫が必要である。簡単に言えば、「誰が来ても楽しく幸せなまち、しらおい」である。

○大淵座長 労働力の不足は外国人により補うという視点から、外国人労働者が町内に定住し起業するなどの可能性がある。そういったことから、人口減の食い止め方についてどのように考えるか。

○今井講師 企業城下町として外国人が多いというはあるが、それとは別に外国人が暮らすまちはよいものだと思っている、白老に合っていると思う。技能実習生だと仕事が決まってお、まちにはあまり影響がないのではないか。

若者定住と同様に、外国人定住にはあえて白老町を選ぶ決め手がないといけない。その基本は、外国人がこのまちで何かに挑戦したい、起業したい、この会社で働きたい、などと思える機会をつくることである。それがその地での結婚や子育てに結果としてつながることがあるのではないか。まちづくりの考え方はそういうものであると思う。

○長谷川委員 コロナの影響でリモートワークが増えて、都会から地方へ移住する動きがあると思うが、白老におけるそのチャンスをどのように捉えているか。

○今井講師 コロナの影響で地方移住のニーズが増えているのかは分からないが、仕事をする場所に制限がない人は、どうせなら環境のよいところで過ごしたいと考えていると思う。そのような人

は既に移住しているかもしれないので、今からそれが増えるどうかは見えない。

○氏家委員 最近の若者は様々な情報媒体により、まちに人を呼び込む力を持っていると思う。若者のチャレンジにまちや議会がどう関わるのかが重要である。若者が本気で何かに取り組むときに、どのような関係性を築くべきか考えさせられた。行政と議会とこれからチャレンジしようとする若者との関係性について、議会としてどのように捉えたらよいか。

○今井講師 若者のチャレンジへの応援にまちのお金を使うことはよいことだと思っている。関係性はまちにより異なる。一般論的には温かく見守り、たまに声を掛けることが精一杯だと思う。

若者は行政や議会の人と直接関わることはやりにくいと思うので、地域カンパニーのような中間団体が支援するのがよい。行政や議会にはそれぞれの役割があり、若者支援の関わりについて職責として役割を担うのは難しいと考えている。

○氏家委員 地域カンパニーの在り方について、そこに従事する人材はまちの中にいるのではないかと思っている。若者の力をどう引き出すかが難しい。一つ一つ乗り越えながら変えていかなければならないというところに来ている。行政が先頭になって何かをする時代ではないのではないかと思うが。

○今井講師 とにかく重要なのは、チャレンジ支援である。とりわけ、薄巻きで多くの人に少しずつ配るよりは、数人にまとまった支援をする方が、結果的には効果があるのではないか。これまで町がチャレンジ支援をしてきたということは、議会としても応援していると捉えてよい。

仕事で白老に関わって2年半が経ち、よいまちだと思っている。他の地域と異なり、農業や酪農、漁業などの基幹産業が主ではないため、ここで何かチャレンジできそうだと思うまちである。ウポポイの運営がもう少し落ち着いて、ウポポイの持つ能力やそこで働く若い人達の力がまちの在り方と合わさっていけたらと思い、パワフルな彼ら彼女らがまちの人達ともっと関わるようになれば、相乗効果が生まれると思っている。

○及川議員 最近若い人達が白老に戻ってきていると感じている。地域おこし協力隊が退任後に町で活躍する姿も見られる。温かみのあるまちづくりが重要だと思うが。

○今井講師 まさにそのとおりである。行政や議会が自信を持って移住定住の路線を進めていくべきであると思う。